

第Ⅱ章 那覇市ガジャンビラ貝塚

I. はじめに

那覇軍港の南岸に接してほぼ東西方向に走る琉球石灰岩の丘陵があり、本貝塚はその中腹部に形成されている。標高は40m前後である。この丘陵の北斜面を国道331号がゆるやかな勾配を描きながら南部の糸満市方面へ延びているが、この坂道を方言で「ガジャンビラ」と呼んでいる。「ガジャンビラ」の名称について、東恩納寛惇は「我謝の坂」の意かもしれぬという見解を述べている（註1）。本貝塚の名称もこの坂道の通称に由来する。

本貝塚は1959年の秋、多和田真淳によって発見された。発見時に多和田によって採集された遺物は『那覇市史資料篇第1巻1』の「那覇市の考古資料」篇に紹介されている（註2）。多和田の資料は縄文晩期の土器を主体に、いわゆる後期（弥生～平安時代並行期）の土器を数点含む内容のものであった。

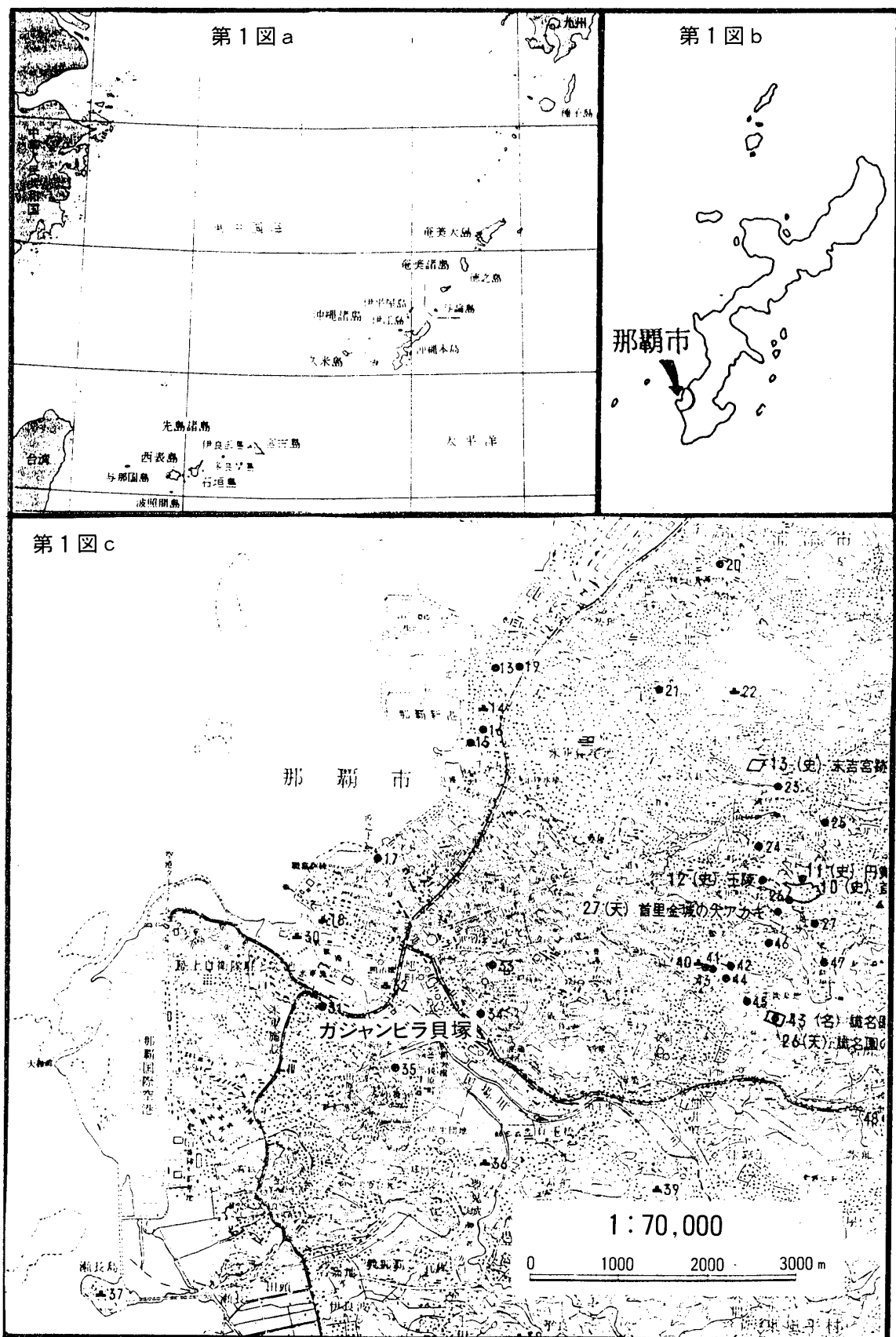
ところで、当時、遺跡地に隣接して採石工事が進行中であり、破壊の爪痕はすでに一部本遺跡にも及んでいた。調査の緊急性を痛感した多和田は本貝塚の発掘調査と採集遺物の整理を高宮に託された。発掘調査は同年12月の冬休みを利用して実施された。

遺跡の地表面は採石工事の準備段階ですでに剥ぎ取られ、岩盤が露出していた。遺物は表土を剥ぎ取られた岩盤上の凹地や岩盤内の亀裂（フィッシャー）部に堆積した茶褐色土層から出土したが、埋蔵量は少なかった。亀裂部における茶褐色土層はきわめて浅く、深

いところでせいぜい18インチの厚さであった。亀裂内の堆積土の断面はいたるところで観察でき、このような露頭部断面で見るかぎり、土層の色による変化は見受けられなかった。したがって、発掘にあたっては同層を任意に上下に2分（0-12インチと12-18インチ）して行なった。遺物包含層は第Ⅱ層にあたるが、第Ⅰ層の表土は前述のようにすでに除去されていた。遺物包含層の下は赤土の基盤層（マージ層）で、同層上面から若干の遺物が出土した（第1表）。

採集遺物は土器・石器などの人工遺物と獣魚骨などの自然遺物であるが、前述したようにいずれも出土遺物は少なかった。自然遺物はまだ専門家の同定を経っていないので、今回は人工遺物のみを紹介する。

なお、本調査以後、昭和56（1981）年に那覇市教育委員会が同市内の遺跡詳細分布調査を実施した折、再度本遺跡の地表調査を行ない（註3）、また、翌昭和57（1982）年には、国道331号改築工事に伴い同市教育委員会が一部試掘調査を行なっている（註4）。併せてご参照いただきたい。



第1図 ガジャンピラ貝塚の位置

- a 「日本の古代遺跡47沖縄」 1993年保育社
 b 「那覇市の遺跡」 1982年那覇市教育委員会
 c 「全国遺跡地図沖縄」 文化庁 1979年

Ⅱ．出土遺物

ガジャンビラ貝塚からは土器・石器・貝製品・褐釉陶器などの人工遺物のほかに、貝類・魚骨・獣骨などの自然遺物や石材として持ち込まれたと考えられる自然礫もわずかに得られている。

人工遺物の出土状況を下記の第1表にまとめた。自然遺物は次の機会にとり上げることにし、今回は省略した。

第1表 人工遺物出土表

	土 器	石 器	貝製品	褐釉陶器	焼 土	合 計
表 採	38	0	0	0	2	40
0"-12"	230	1	1	0	8	240
12"-18"	65	0	0	1	1	67
マージ層	3	0	0	0	0	3
出土層不明	0	1	0	0	0	1
合 計	336	2	1	1	11	351

A) 貝製品

第2図1（第I図版1）はメンガイの右殻を利用した貝錘と思われる製品で、殻長は約5cm、殻幅は5.2cm、重量は12.34gで全体的に小振りである。殻頂部付近に粗孔を穿っている。孔の大きさは縦1.7cm、横1.6cm。使用痕は確認できないが全体的に水磨を受けている。0-12インチレベルより出土。

B) 石器

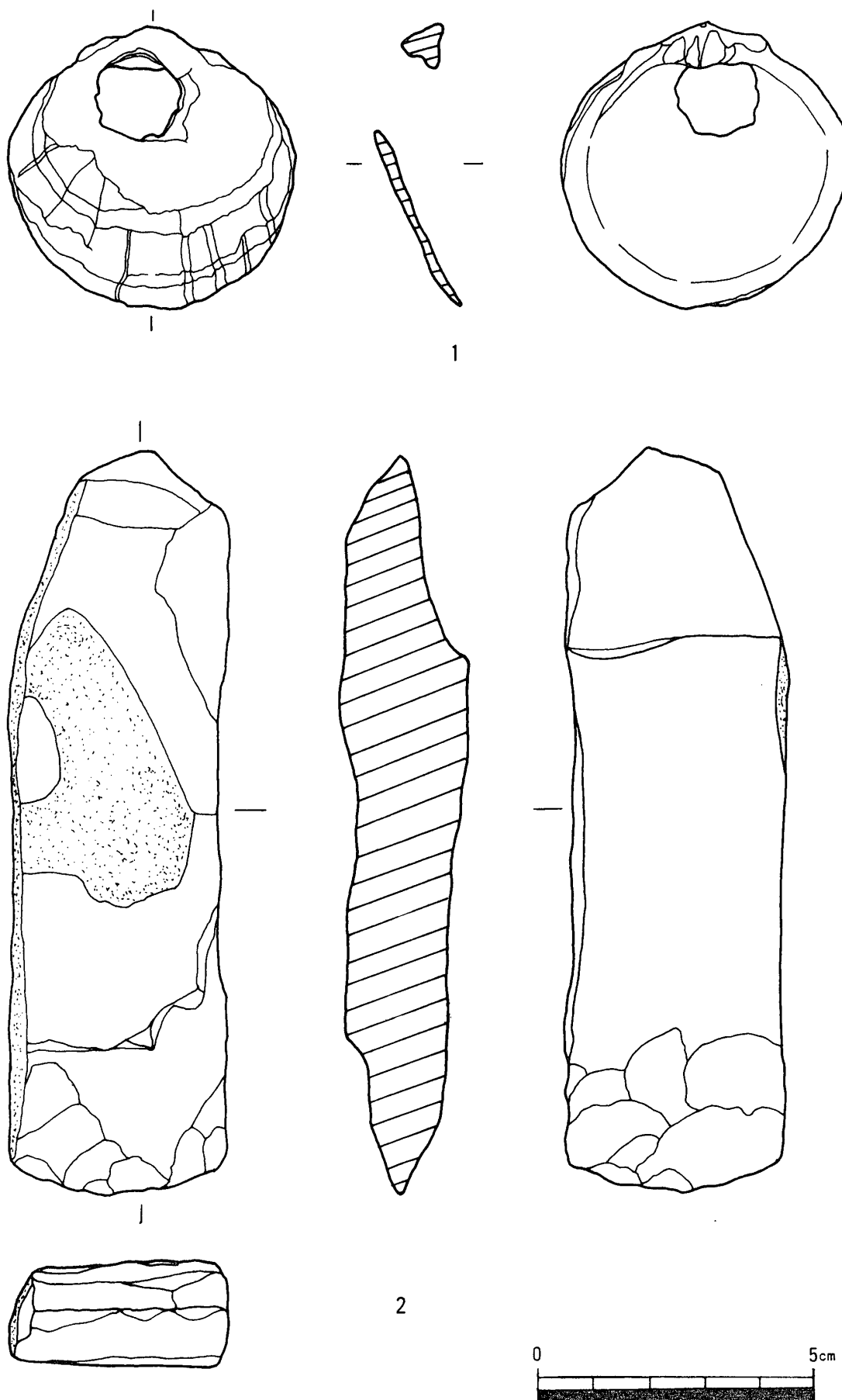
第2図2（第I図版2）は石斧の未製品と考えられる資料である。打裂によって概形を短冊形に整形している。表面の頭部側とその左側面に自然面を残す。研磨は認められない。現状から石斧の未成品と推察しているが、材質が嘉陽層の軟質の砂岩であり、樹木などの

伐採には不向きである。しかし、その形状から土掘具としてなら使用可能かと思われる。器面に打割直後の粗さはなく、全面に手なれ様の滑らかさがある。長さ13.4cm、最大幅3.9cm、厚さ1.9cm、重量204gである。0-12インチレベルより出土。

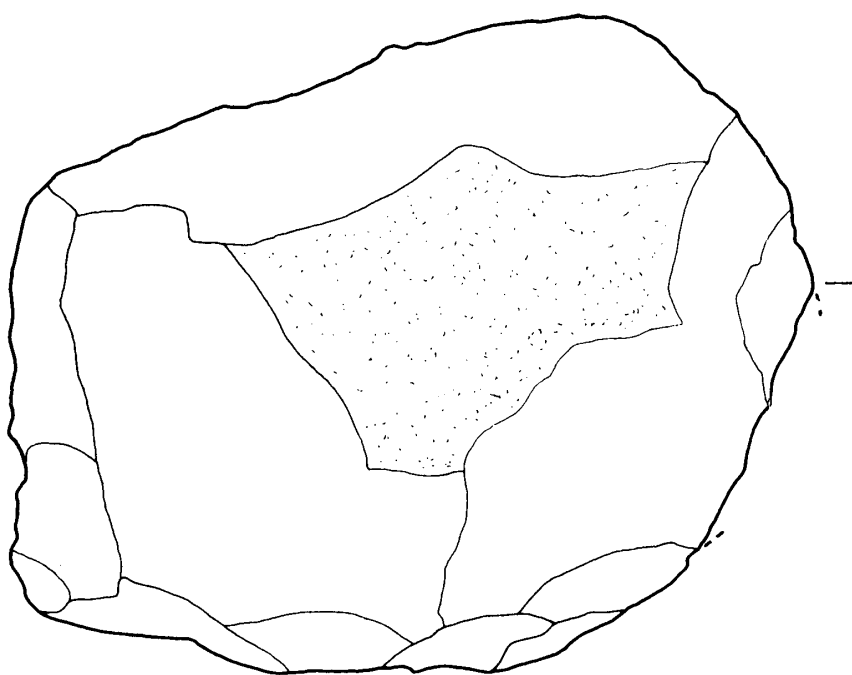
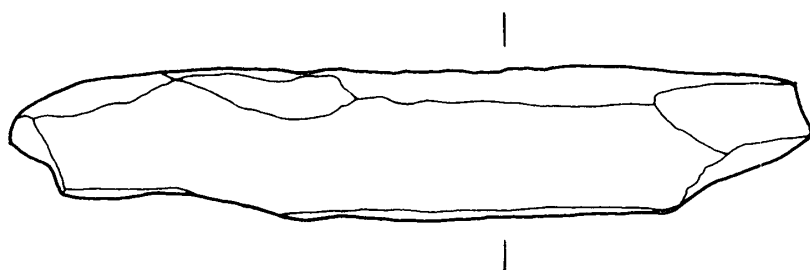
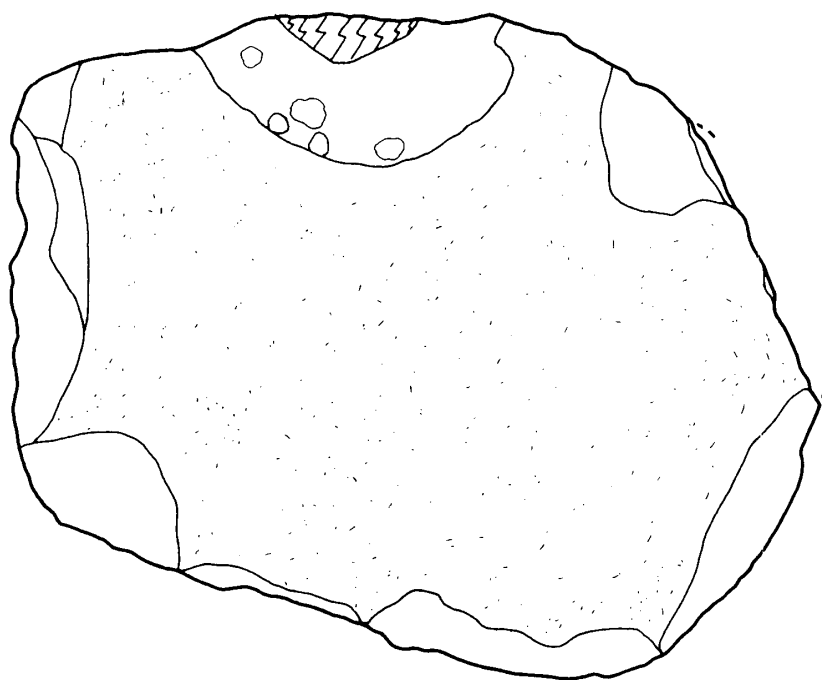
第3図(第II図版)は、加工痕をもつもので、一部破損しているものの完形に近い。表裏面とも打裂による調製剝離が加えられている。表面は中央に近い一部に自然面を残しているが、ほぼ全面に打裂を加えており、裏面は逆に大部分に自然面を残して周辺部のみ調製剝離を加えている。偏平な自然礫を利用しており、表裏面ともに手なれ様の摩耗痕が見受けられる。両側縁に段違いの浅い抉りが設けられている。材質は第2図2の資料と同様嘉陽層の砂岩で、前者よりやや軟質である。打製石斧の可能性を検討中。表採資料。長さ13.3cm、幅10.5cm、厚さ2.5cm、重量510g。出土層は不明。

C) 土器

本貝塚出土の土器はすべて小破片で復元して完形を示せるような資料は含まれていない。口縁部や底部の形態と器面調整、胎土等を観察したところ、暫定編年前V期（縄文晩期）の宇佐浜式土器の範疇に入るものと、暫定編年後IV期（平安時代相当?）の範疇に入るものがあり、前者を宇佐浜式土器、後者を後期土器と分類した。各層ごとの出土状況は第2表に記す通りである。



第2図 貝製品(1)、石器(2)



第3図 石器

第2表 土器出土表

土器 層序	宇佐浜式土器			後期系土器			合 計
	口縁部	胴 部	底 部	口縁部	胴 部	底 部	
表 採	1	1	0	1	31	4	38
0°-12°	3	17	0	7	192	11	230
12°-18°	0	10	0	1	52	2	65
マーヅ層	0	3	0	0	0	0	3
合 計	4	31	0	9	275	17	336

イ) 宇佐浜式土器

本貝塚で暫定編年前V期の宇佐浜式土器の範疇に入る土器は、口縁部と胴部のみで底部は得られていない。

1) 口縁部

第4図1（第Ⅲ・Ⅳ図版1）は山形口縁の左側の資料である。肥厚部の断面形状は三角形を呈し、肥厚部の厚さは最大1.1cm、他は7～8mmである。図上復元が可能で、口径は推算13cmで深鉢形に属する。表採品である。

同図2（第Ⅲ・Ⅳ図版2）も口縁部の断面が三角形を呈する。口径は不明。したがって器種も不明。肥厚部の最大厚は約1cm、他は7～8mmの厚さである。0-12インチレベルより出土。

同図3（第Ⅲ・Ⅳ図版3）は肥厚部の断面が方形に近いが、上端部の幅が若干小さく、わずかに三角形の形状をとどめている。口径・器種とも不明。器壁は口唇部が約6mm、肥厚部の下端が約6mm、他は約5mmである。0-12インチレベルより出土。

同図4（第Ⅲ・Ⅳ図版4）は肥厚部の認められない口縁資料で、現存部は直口ぎみに立ち上がり、口唇部は尖る。器面は表裏面ともにナデ調整を行っている。肥厚が認められないことから、宇佐浜式から外すべきかと考え

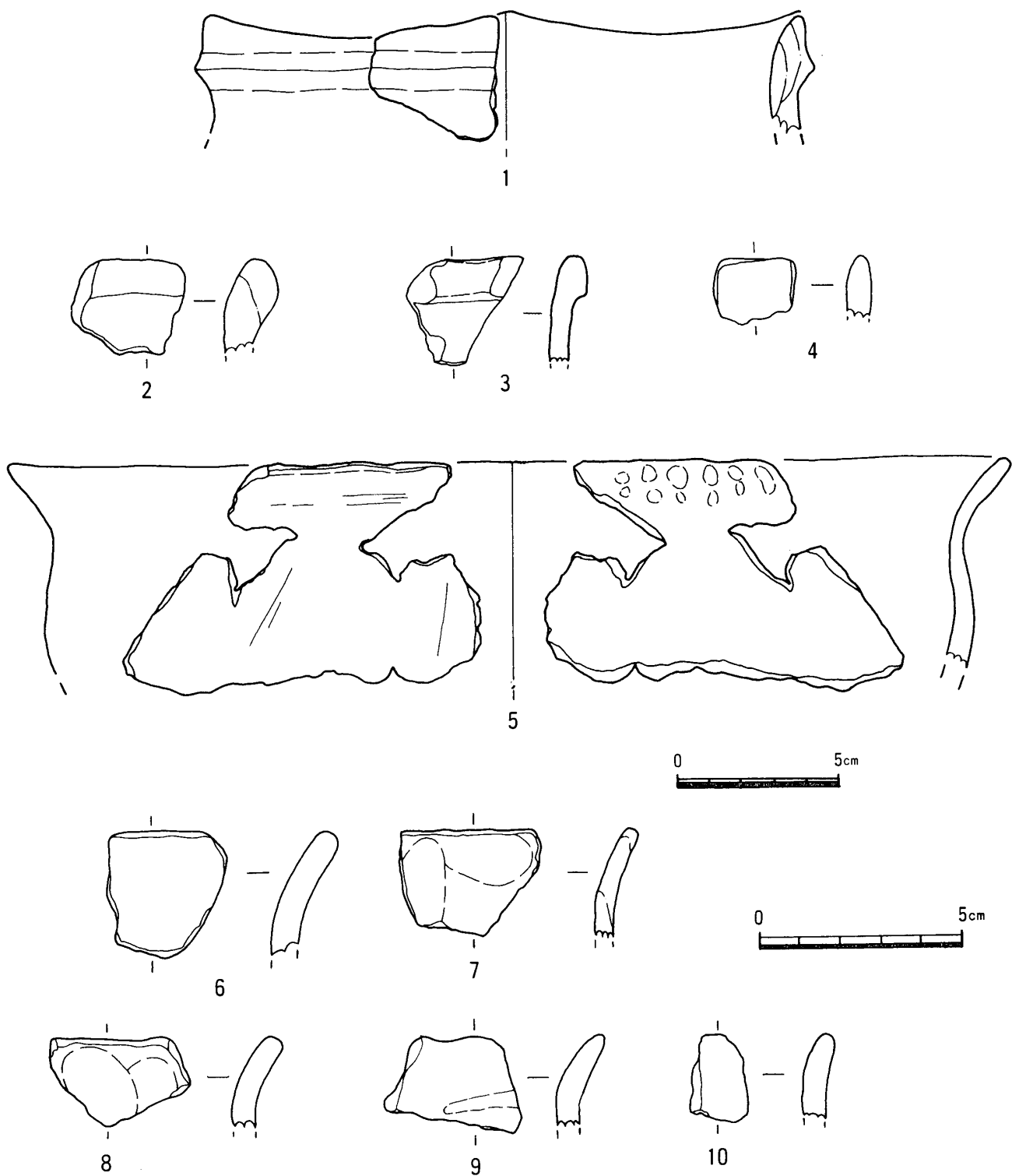
たが、器色、器肌、混入物等の特徴が、他の後期土器よりむしろ宇佐浜式に近似することから、この項に分類した。宇佐浜式にも無肥厚のものはあり、それらに類するものである。0-12インチレベルより出土。

2) 胴部

胎土は砂質で器面がザラザラしてるものと泥質のものがあるが、後者は稀である。混入物が多量に混入され、大きさは1mm大の粒の粗いものから1mmにも満たない小粒のものまであり、石英を主体にわずかに異質岩片として粘板岩がみられる。器厚は6.0～6.9mm大のものが全体の41.5%を占める（第3表）。器色は明るい橙褐色のものが多い。器面調整が確認できるものは少なく全体の6%で、撫で調整のほか擦痕や条痕などもみられた。焼成は普通である。

第3表 土器胴部の器厚測定表

土器	層序	土厚 (mm)	4.0	5.0	6.0	7.0	8.0	9.0	10 以 上	合計
			4.9	5.9	6.9	7.9	8.9	9.9		
宇 佐 浜 式	表 採		0	0	1	0	0	0	0	1
	0°-12°		1	6	8	1	1	0	0	17
	12°-18°		0	1	3	0	1	0	1	6
	マーヅ層		0	0	2	1	0	0	0	3
	小 計		1	7	14	2	2	0	1	27
後 期 土 器	表 採		0	0	0	1	0	0	1	2
	0°-12°		5	4	7	4	1	0	0	21
	12°-18°		0	2	1	1	1	0	0	5
	マーヅ層		0	0	0	0	0	0	0	0
	小 計		5	6	8	6	2	0	1	28
土 質 土 器	表 採		1	6	13	9	2	0	1	32
	0°-12°		6	62	48	29	17	5	2	169
	12°-18°		6	16	17	6	5	0	0	50
	マーヅ層		0	0	0	0	0	0	0	0
	小 計		13	84	78	44	24	5	3	251
合 計			18	90	86	50	26	5	4	279
計			19	97	100	52	28	5	5	306



第4図 宇佐浜式土器(1~4)、後期土器(5~10)

ロ) 後期土器

本貝塚出土の81.8%の土器は後期土器である。すべて無文で有文資料は得られていない。器種は口縁部の形態が外反するものと直口するものがあり、甕形のほか壺形の可能性のある口縁部が1点得られている。底部は乳房状尖底、くびれ平底、平底の3種が得られている。

1) 口縁部

a) 甕形

甕形に分類できる資料は全部で9点得られ、外反するもの(第4図5~10・5図2)と直口のもの(第5図1)に分けられる。

第4図5(第Ⅲ・Ⅳ図版5)は口径の推算が30.4cmで、口縁部は外反し頸部でくびれ、胴上部がわずかに張る器形に属し、口唇部断面は丸みを帯びる。丁寧に器面調整されている。内面には口縁部にそって浅い指頭圧痕がみられる。器面は両面とも撫で調整を行なっているが、表面の口縁部には横位の、そして胴上部には縦位の擦痕がわずかながら消えずに残っている。器色は黄褐色を呈し、焼成は良い。胎土はやや砂質で、鉍物の混入量が多いが石英を主体に石灰岩の破片などが見られる。表採の口縁部と0-12インチレベル出土の胴部片が接合できた資料である。

同図6(第Ⅲ・Ⅳ図版6)は器色が内面は明るい褐色、外面は煤けて黒褐色を呈する。口径は不明。口縁部は外反し、胴部以下は不明だが胴部の若干張る器形が推定される。口唇部は丸みを帯びる。焼成は良好。混入物は石英のほか石灰岩の破片などが見られる。両面とも撫で調整され、器面は平滑である。他

の後期土器資料に比べると器質が若干違う感じを受けるが、宇佐浜式土器とは器肌や混入物などが異なり、特に混入物の組成は他の後期土器と一致することから、後期土器とみなしてよいと思う。0-12インチレベルより出土。

同図7(第Ⅲ・Ⅳ図版7)は口唇部が丸く形成され内外面ともに指頭圧痕がみられ、器面も若干凸凹を呈している。他の後期土器に比べ器面調整が雑な感じを受ける。器色は内面が薄橙色、外面は明橙色だが、部分的に黒色を呈する部分もある。混入物には微量の石英と炭化物が含まれている。焼成は普通。0-12インチレベルより出土。

同図8(第Ⅲ・Ⅳ図版8)は口唇部を丸く形成し、外面には指頭圧痕がみられるが全体的に撫で調整を行なっている。外面は暗褐色、内面は白っぽい橙色、混入物は石英とサンゴの破片がわずかに見受けられる。焼成は良い。0-12インチレベルより出土。

同図9(第Ⅲ・Ⅳ図版9)は口唇部を舌状に形成する。口縁部をくの字状に屈曲させる特殊な器形である。全体的に撫で調整されているが、外面に調整の際に入ったと思われる横位の浅い凹線が残る。内外面とも暗褐色を呈する。混入物は少量で石英が含まれており、焼成は良い。12-18インチレベルより出土。

同図10(第Ⅲ・Ⅳ図版10)は口唇部を軽く外反させ、同部の断面は舌状を呈する。両面ともに撫で仕上げであるが、内面に擦痕が消え切らずに残る。内外面とも白橙色を呈し、表面には炭化物のようなものが付着している。混入物は石英がわずかに確認できる。焼成は良い。0-12インチレベルより出土。

第5図1（第V・VI図版1）は口縁上端の破片で、口唇部は丸みを帯びる。器面は撫で調整される。内外面とも白橙色を呈する。混入物は石灰岩の破片と石英がみられる。焼成は悪く、吸水性の強い土器である。0-12インチレベルより出土。

同図2（第V・VI図版2）は口唇部を折り曲げるもので、器面には石灰分も混ざって土が付着し、器面観察が困難である。焼成は悪い。器色は橙褐色で、混入物はほとんど確認できないが石灰岩の破片がわずかにみられる。0-12インチレベルより出土。

b) 壺形

第5図3（第V・VI図版3）は口縁部へ向かって開いており、広口の壺型が推定される。口径は推算7.2cm。口唇部は丸みを帯びる。器面はかなり摩耗していて焼成も悪く、器質は泥胎で吸収性が強い。器色は橙褐色。混入物は微量の石灰岩の破片がわずかにみられる。他に1mm大の土の粒もみられる。0-12インチレベルより出土。

2) 胴部

胎土は砂質と泥質があり、後者が76%と主流を占める。泥質は手で触ると粉末がつくような土器片が多く、混入物はわずかに微細な石灰岩の破片や石英を含むか、観察できないものもある。器色は淡い橙褐色、黄褐色、赤褐色のものがみられる。焼成は一般的に悪い。器厚は5.0~5.9mmが32%、6.0~6.9mmが21%と薄手である（第3表）。

砂質のものは手触りがザラザラで、混入物に微粒の石英と微細な石灰岩片が含まれる。

器色は茶褐色、橙褐色を帯びるものがある。焼成は比較的良いものが多い。器厚は6mm前後のものが多く、これも薄手のものが一般的である（第3表）。

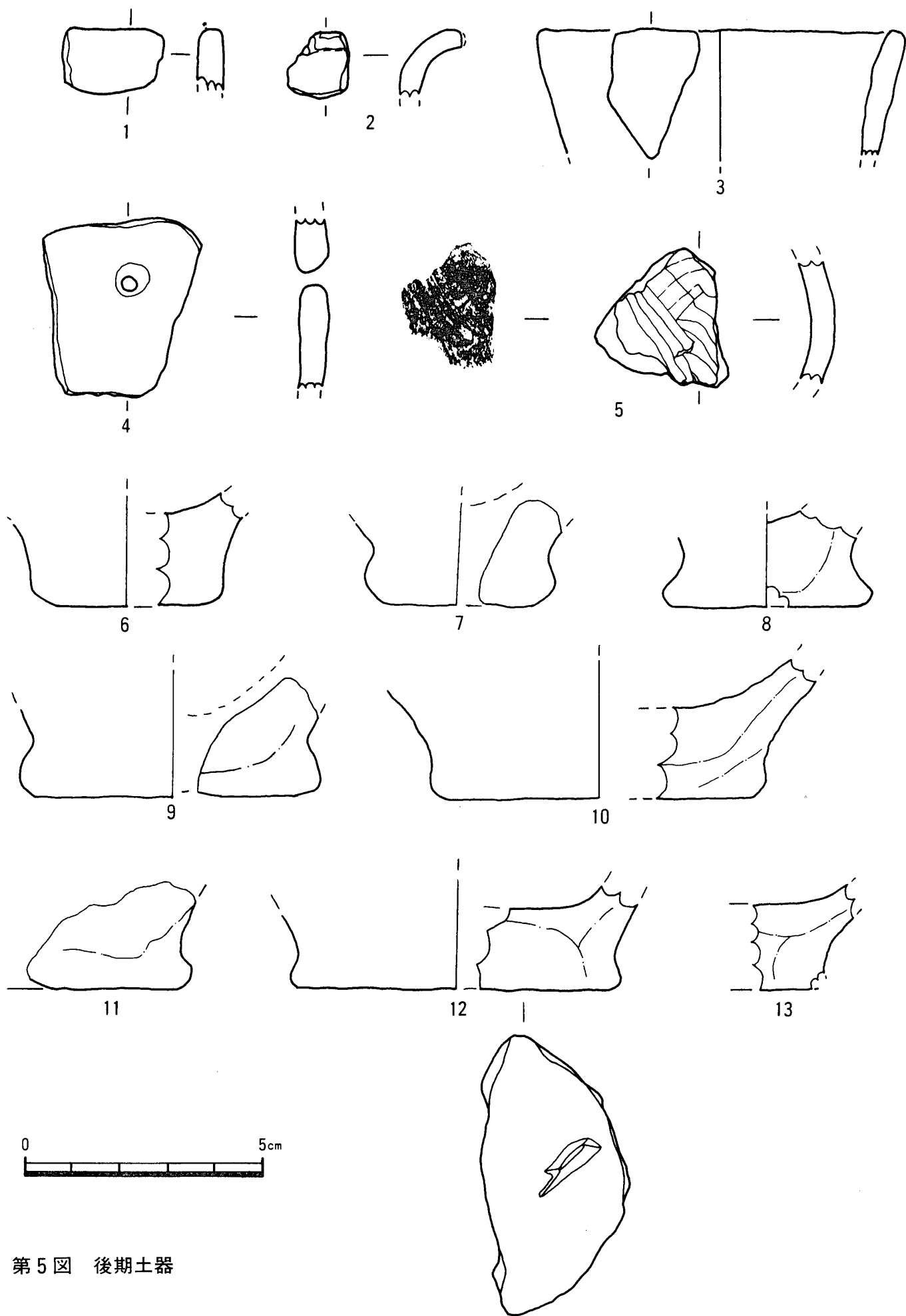
器面調整は泥質・砂質とも口縁部では撫で調整を行なうものがほとんどだが、指頭圧痕や擦痕が残るものもある。胴部及び底部付近は撫でによるものが主流で、その他、条痕や擦痕を施すもの、その上を撫で消すもの等が観察できるが両者あわせても13%と少ない。ただ1点だけ器質が異なる胴部片があり、胎土は泥胎に近いが、焼成は非常に良く堅緻で、内外面とも黒色を呈する。外面は研磨されツルツルで滑らかになっているという点も、本貝塚出土の他の土器にはみられない特徴である。内面に擦痕のような調整がみられ、中村愿氏から内面を草の茎のようなもので調整しているであろうとのご教示を得た。混入物は細かい石英が含まれる。今後検討を要する土器である（第5図5・第V・VI図版5）。

i) 有孔の胴部

第5図4（第V・VI図版4）は有孔の胴部片である。径3mmの孔が穿たれており、内面よりも外面からの穿孔が深い。器面は剥落し、したがって器面の特徴は掴めないが、胎土中央部は灰白色を呈する。胎土は泥質、混入物には石英などが微量含まれている。焼成は悪い。器壁は0.7cm。12-18インチレベルより出土。

3) 底部

本貝塚で得られた土器底部は乳房状尖底が2点、くびれ平底が12点、平底が1点、そし



第5図 後期土器

て形状不明品が1点である。

a) 乳房状尖底

第5図6・7は乳房状尖底に分類できる。いずれも小破片であるが厚底で底径は4cm前後を測る。

第5図6（第V・VI図版6）は底面から直線的に立ち上がってゆるやかに開くタイプで、厚さは1.9cm、底径約4cmの厚底である。器色は明赤褐色で、混入物には微細な石灰岩片がみられる。焼成は良く、外面は撫で調整である。内面は煤けて黒色を呈する。0-12インチレベル出土。

同図7（第V・VI図版7）は内面が残っていないが2cm以上の厚底になるとみられる資料で、底径は約3cmである。形状は底面側縁の突出部は丸みを帯び、一旦くびれて胴上部へと開くタイプ。器色は明るい橙褐色で石英を混入している。焼成は良い。0-12インチレベル出土。

b) くびれ平底

第5図8～13・第6図1～6はくびれ平底である。厚さで分類すると1.7cm以上の厚底（第5図8～13）と、1.0cm前後の一般的なもの（第6図1～6）に大別できる。また、全体的形状から底部のくびれが強く底面側縁の突出部が張り出すタイプ（第5図9）、底面側縁の突出部が小さいタイプ（第5図10～13・第6図1・2・6）、底面からの立ち上がりが直線的で胴部へと開くタイプ（第6図3～5）に分類される。以下、器厚、底径、器色、混入物、焼成等について記述する。

第5図8（第V・VI図版8）はくびれが強

く底面の外縁が突出して尖っている。厚さ1.8cm、底径は4.4cmを測る。器色は黄褐色で混入物はわずかに石英がみられる。焼成は良い。表採品である。

同図9（第V・VI図版9）はくびれが明確で底側縁の突出が強い。突出部は丸みを帯びる。突出部は粘土紐の貼付によってできている。突出部がこのような大きいのはこれ一点のみで、この種の形態は本貝塚では稀である。底側縁部の内面は残っていないが、厚さ2cm以上の厚底が推定され、底径は6.2cmになる。器色は明るい橙褐色で微粒の石灰岩片や石英を少量混入するが、1mmに満たない土の粒が多量に確認できる。焼成は普通。表採品である。

同図10～13はくびれは強いが、底側縁の突出が弱いタイプである。

同図10（第V・VI図版10）は厚さ1.9cm、底径は約7cm。丸底に粘土紐を貼付することによって平底をつくる。器色は暗褐色である。胎土は砂質で器面はざらつく感じを受ける。混入物は石灰岩の破片と石英のほかサングの破片もみられる。焼成は良い。0-12インチレベルの出土。

同図11（第V・VI図版11）は厚さ1.7cm以上のものだが底径は不明。外側縁部には粘土帯を貼付して突出部をつくる。器色は茶褐色、器面はざらつく感じを受ける。石英が多量に混入されている。焼成は良い。12-18インチレベル出土。

同図12（第V・VI図版12）は厚さ1.7cm、底径7cmを測る。底面の外縁部に粘土帯を貼付して突出部をつくる。内面には煤が付着している。外面には長さ0.8cm、幅0.1cmの圧痕

が残る。器色は明橙色で、微細な石灰岩片と少量の石英を混入する。0-12インチレベル出土。

同図13（第Ⅴ・Ⅵ図版13）も底側縁部に粘土紐を貼付するもので、突出部は破損している。厚さは1.8cmだが底径は不明。乳房状尖底の可能性もある。器面の大部分に石灰分が付着して器面観察が難しいが、器色は明橙色、混入物として微細な石灰岩片が含まれている。1mm大の土の粒も観察できる。焼成は悪い。0-12インチレベル出土。

第6図1（第Ⅶ・Ⅷ図版1）は厚さ1.1cm、底径4.2cmを測る。内面は幅6mmのヘラ状工具で調整されている。破損面からみると底部は後で貼付している。器色は明橙色、微粒の石英がわずかに混入する。焼成は普通。表採品である。

同図2（第Ⅶ・Ⅷ図版2）は上部を破損するが、典型的なくびれ平底である。厚さ約1cm、底径は約7cm。器色は明橙色を呈し、微粒の石灰岩片が少量、石英がわずかに混入される。表採である。

同図6（第Ⅶ・Ⅷ図版6）は残存部の厚さが1.2cm、底径は不明。底外面に接合の痕跡がわずかに窺える。器色は明橙色を呈し、わずかに石英を混入する。焼成は普通である。0-12インチレベル出土。

同図3（第Ⅶ・Ⅷ図版3）は残存部の厚さ1.4cm、底径は6.2cm。器色は明るい橙褐色で石英を少量混入する。焼成は普通。内面は黒色を呈する。0-12インチレベル出土。

同図4（第Ⅶ・Ⅷ図版4）は厚さ1.1cm、底径は4.4cmを測る。器色は黄褐色で、微粒の石灰岩片と石英を少量混入する。1mm大の

土の粒も観察できる。焼成は普通。0-12インチレベル出土。

同図5（第Ⅶ・Ⅷ図版5）は厚さ0.6cm、底径は約4.2cmを測り、他の底部資料に比べるとやや小型の感じを受ける。内面の一部に擦痕が残る。器色は暗褐色を呈する。微細な石灰岩片がわずかに混入する。焼成は普通である。0-12インチレベル出土。

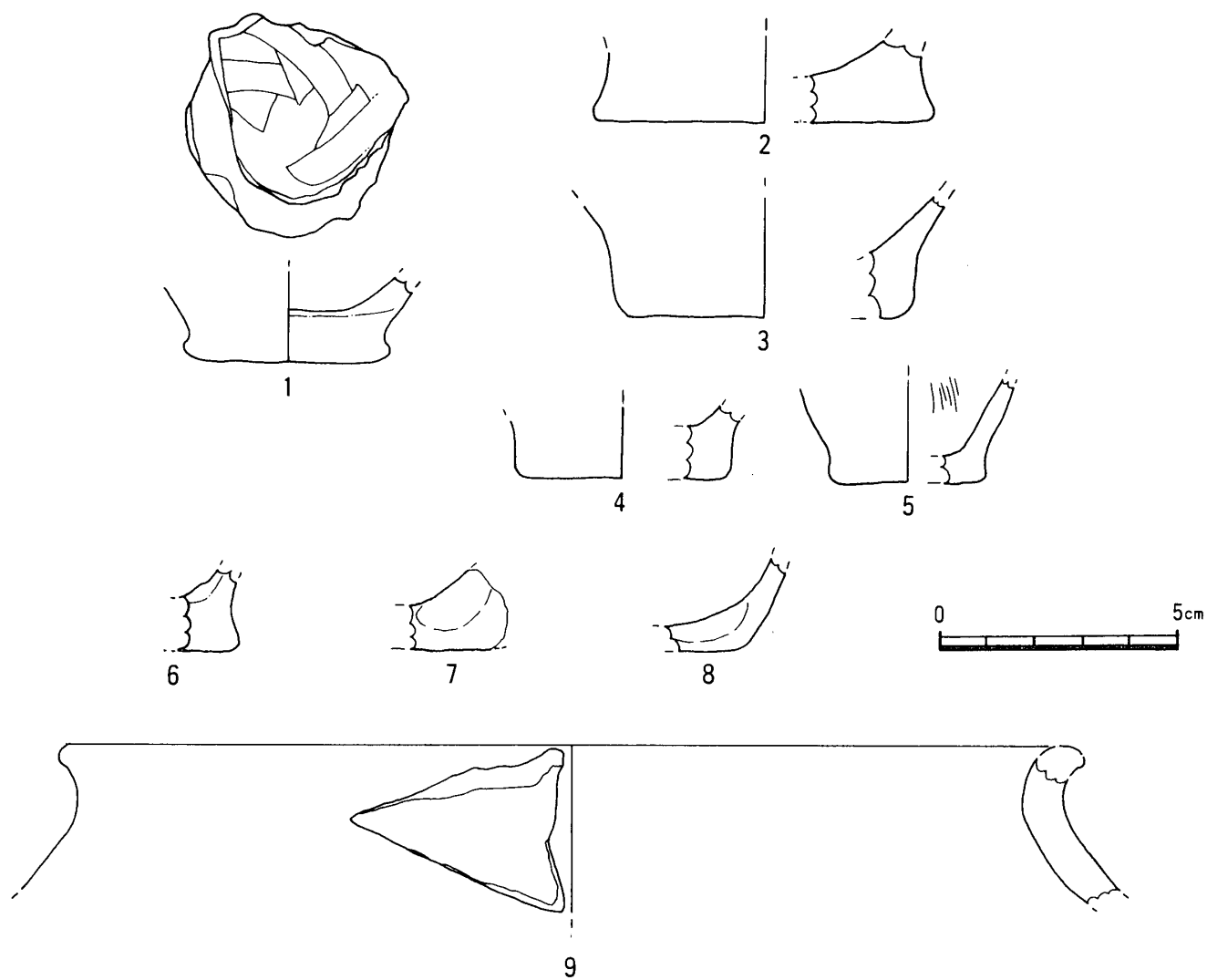
同図7（第Ⅶ・Ⅷ図版7）は破損品で形状不明の資料である。厚さは1cmを測り、底径は不明。器色は橙褐色、混入物は石英が微量みられる。焼成は悪い。0-12インチレベル出土。

c) 平底

第6図8（第Ⅶ・Ⅷ図版8）は他と形状の異なるものである。1点のみ得られ、外面にくびれが認められない。全体的に薄く底部の厚さは0.6cmだが、底径は不明。内面は黒色を呈し、外面は白っぽい明橙色を呈する。胎土は泥質、混入物は石英が少量みられる。焼成は普通である。0-12インチレベル出土。

d) 褐釉陶器

第6図9（第Ⅶ・Ⅷ図版9）は壺の頸部である。外面には薄く茶褐色の釉が残り、内面にもかすれるように釉が残る。素地は灰褐色で赤色粒と黒色鉱物、透明の粒子を混入する。頸部の内径は19cmである。金武正紀氏によると玉縁の肩の張る壺形になるもので、12～15世紀の年代幅をもつ褐釉陶器とのご教示いただいた。12-18インチレベルより出土。



第 6 図 後期土器(1~8)、褐釉陶器(9)

Ⅲ. おわりに

以上本貝塚出土の遺物について記述した。本貝塚は宇佐浜式土器やいわゆる後期系土器の出土によって、縄文晩期と弥生～平安時代並行期に比定される。出土遺物についてみると、石器・貝製品は少なく、最も多いのは土器である。骨製品は得られていない。

貝製品はメンガイを利用した貝錘と思われる資料が1点得られている。他の後期遺跡出土の貝錘は、シャコガイやリュウキュウサルボウなどを主に使用しているが、メンガイ製のものも少なくない（註5）。類例資料としては、勝連城南貝塚（註6）、熱田貝塚（註7）などでメンガイの有孔製品が報告されている。本貝塚のものは後期土器に伴うものであろう。

石器は2点得られている。石質について大城逸朗氏に同定していただいた結果、両者とも嘉陽層の軟質の砂岩を用いており、石質から伐採具としての可能性は難しいが、第2図2は短冊形の概形を有し、調整剝離を加えているものの、全面に手なれ様の摩耗痕が認められ、打製石斧（特に土掘り具として）の可能性が考えられる。

第3図1は偏平な自然礫を利用し、表裏面に調整剝離を加えている。表面の一部と裏面の大部分に自然面を残す。出土層は不明であるが、上記資料とともに打製石斧であれば宇佐浜式に伴う可能性が強い。

土器は先述のように宇佐浜式土器と後期土器が得られている。

宇佐浜式土器は土器全体の出土量でみると約10%と少ない。確認できる器種は深鉢形のみで、口縁の断面形状には2種認められ、ひ

つつは肥厚帯を形成するもの（3点）、他は肥厚帯の認められないもの（1点）である。前者の口縁形態には山形口縁と肥厚帯の断面形状がカマボコ状を呈するものや方形に近いものなどが見受けられる。後者は平口縁のものであろう。

本貝塚からは宇佐浜式土器の底部は出土していないため、底部の形態は不明である。

後期土器は本貝塚の主体となる土器である。器種は甕形と壺形が得られており、甕形が主体で、壺形をわずかに伴う。甕形は8点で、口縁形態が外反するものと直口のものに分類される。壺形は1点のみである。

底部は乳房状尖底・くびれ平底・平底の3種が得られている。乳房状尖底は2点と少なく、いずれも厚底で、底径は4 cm前後を測り底面を平坦に整形している。くびれ平底は12点と最も多く出土しているが、他の後期遺跡から出土するくびれ平底と比較すると、本貝塚のものには厚底が多いという特徴があり、また、底部の製作に関して観察可能なものについてみると、いずれも丸底に粘土帯を貼付することで平底を形成する。粘土帯の痕跡が明瞭なものと不明瞭なものがある。平底は1点しか得られていない。形態は縄文時代のものに類似するが、器質はいわゆる後期のものである。

全体的に焼成は悪く、脆弱なものが多い。したがって吸水性が強い。器色は数種類が認められるが、黄褐色や明褐色など明るい器色のものが主体をなす。テンパーには石英、石灰岩の破片、稀にサンゴの破片が見受けられ

る。全体的に混入量は少ない。

本貝塚は土器からみると、先述のように縄文晩期と弥生～平安時代伴行期に比定される。しかし、宇佐浜式の出土量は微量で、主体はいわゆる後期土器である。しかし、後期土器には有文資料は得られておらず、無文化が進行している点で、後期でも時期のかなり下降する遺跡とみられるが、乳房状尖底を含むなど、古い要素も認められる。以上から本貝塚は後期でも一定の時間幅をもつが、無文化が進行している点を重視すると、後期末頃を主体とする遺跡と考えられる。

* 石器の石質と土器のテンパーについては大城逸朗氏に同定していただいた。

《註文献・注釈》

(註1) 東恩納寛惇『南島風土記－沖縄・奄美大島地名辞典』沖縄郷土文化研究所 1964

(註2) 高宮廣衛「那覇市の考古資料」『那覇市史資料篇第1巻』那覇市史編集室 1968年

(註3) 『那覇市の遺跡』那覇市教育委員会 1982年

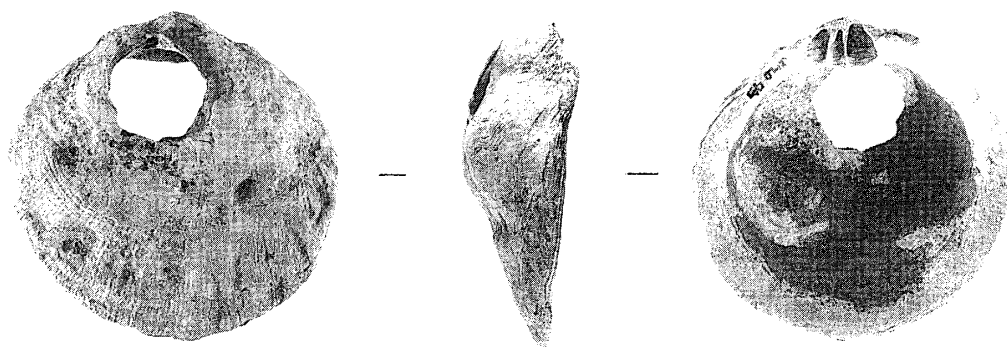
(註4) 『ガジャンビラ丘陵遺跡発掘調査報告書』那覇市教育委員会 1983年

(註5) 大城 慧「貝鍾についての一考察－後期貝塚出土資料の場合－」『沖縄県教育委員会文化課紀要』第4号 1987年

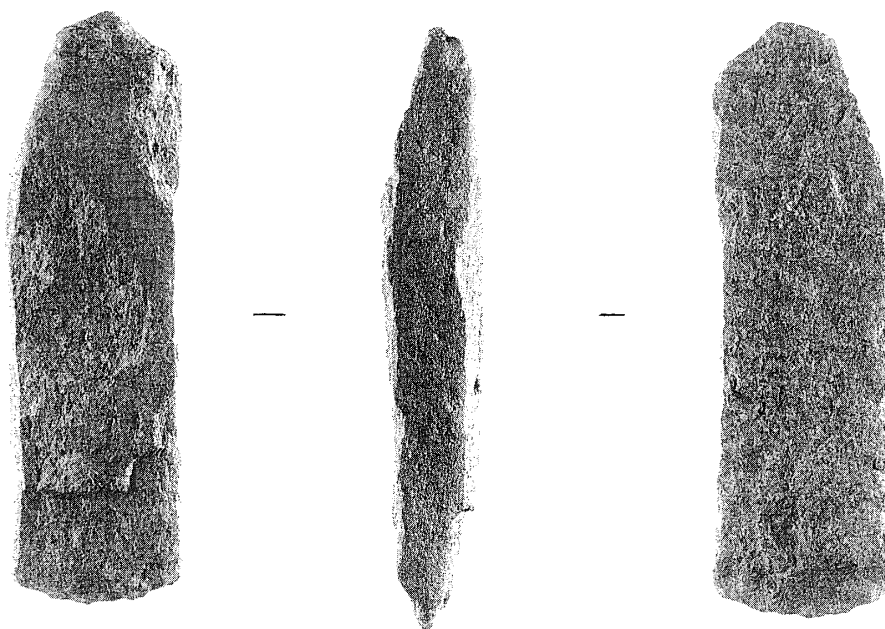
(註6) 『勝連城』勝連町教育委員会 1983年

(註7) 高宮廣衛ほか「恩納村熱田貝塚調査

概報」『沖大論叢』9巻1号 沖縄大学 1969年

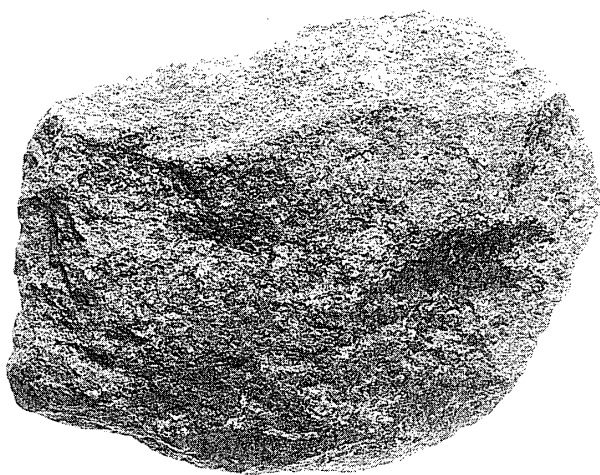
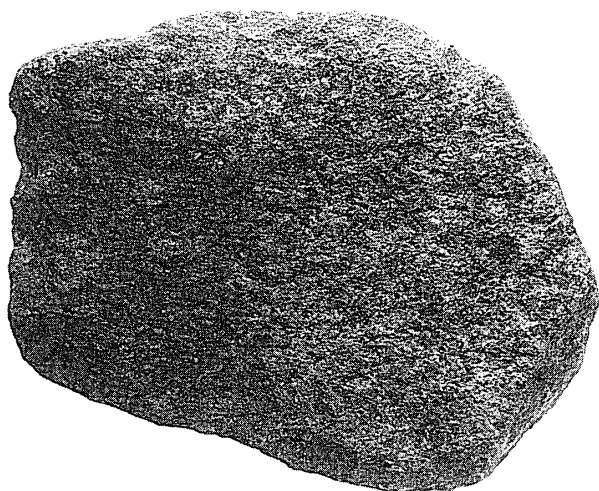


1

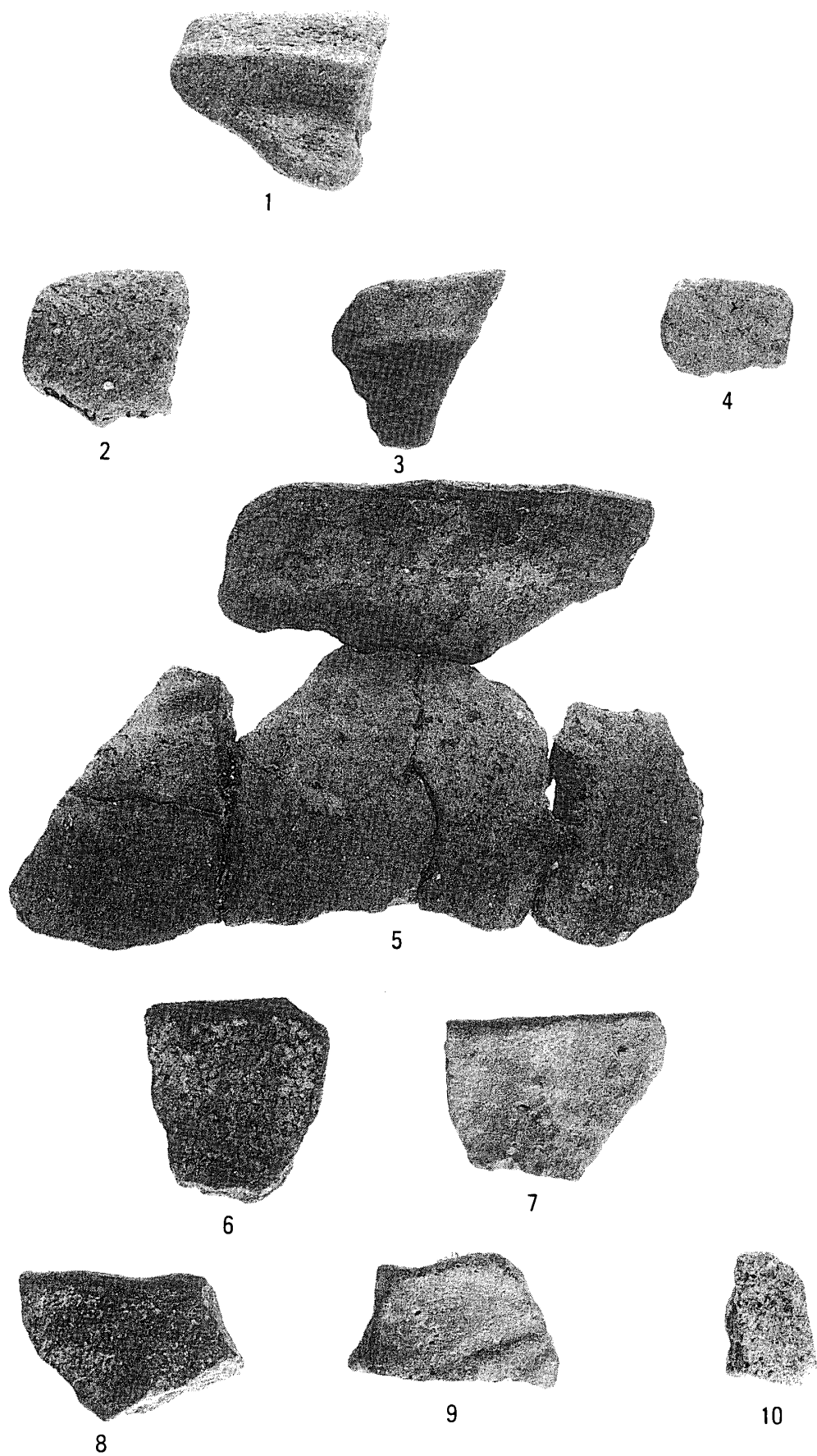


2

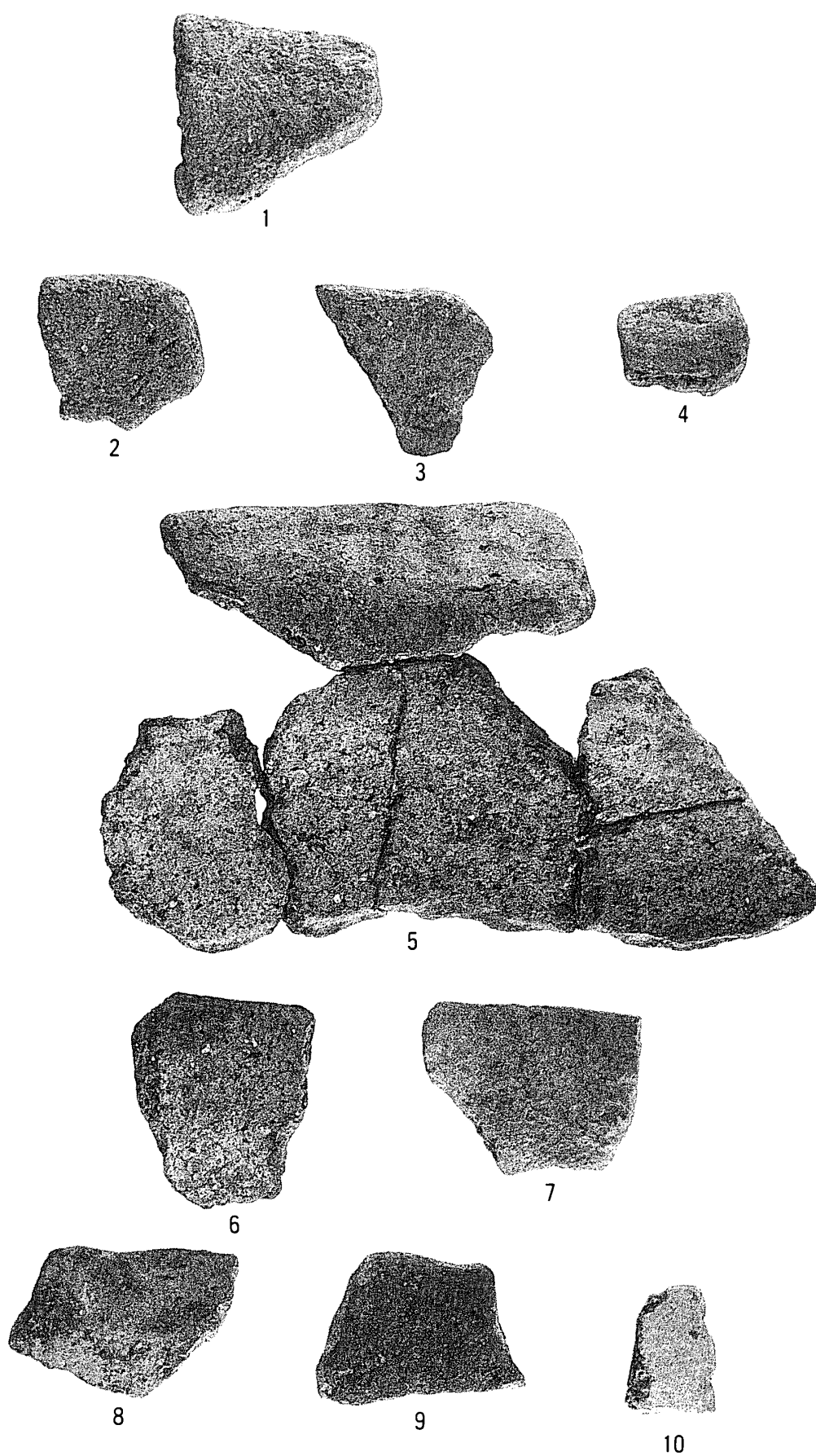
第 I 図版 貝製品(1)、石器(2)



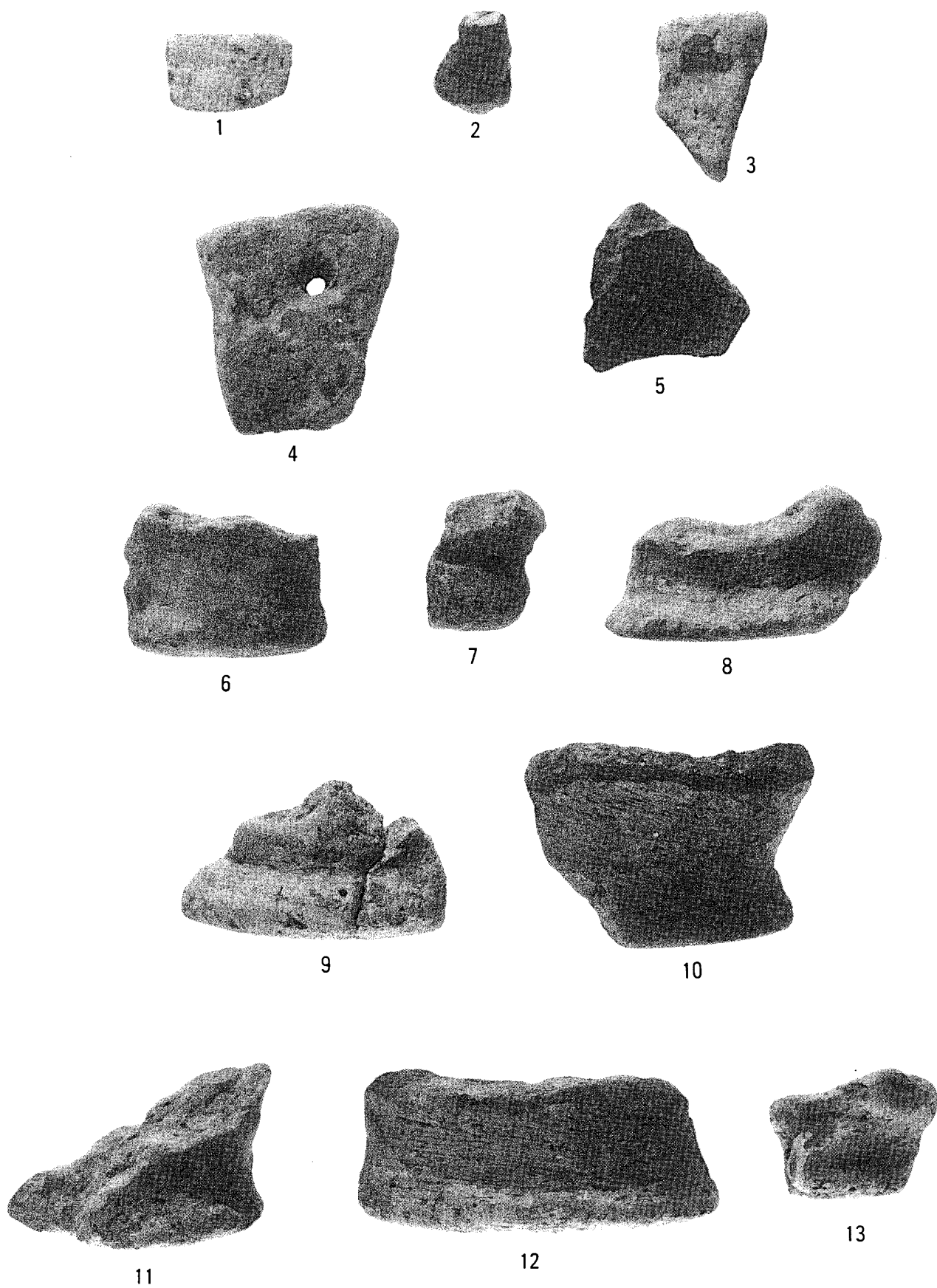
第II図版 石器



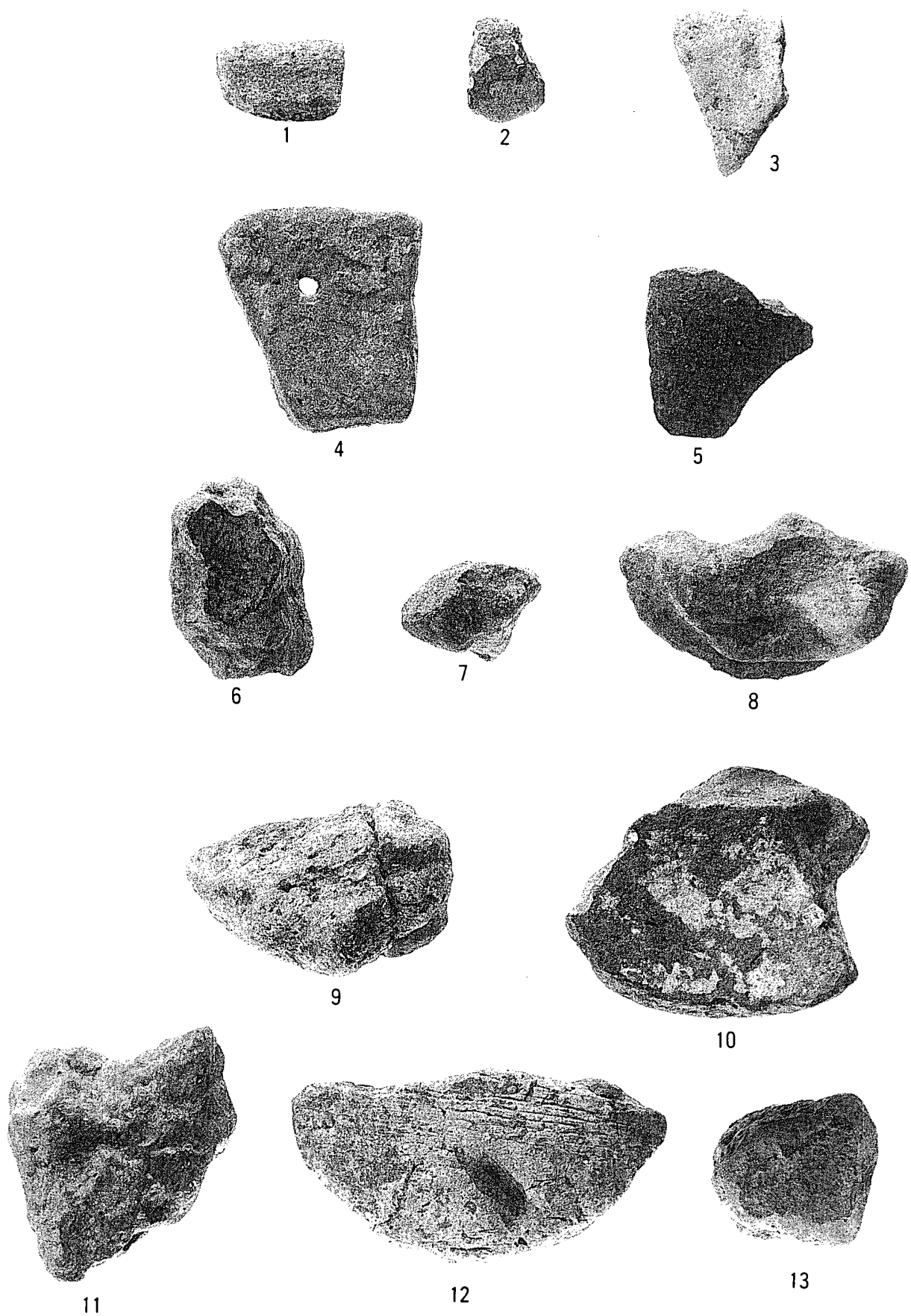
第Ⅲ図版 宇佐浜式土器の表面(1~4)、後期土器の表面(5~10)



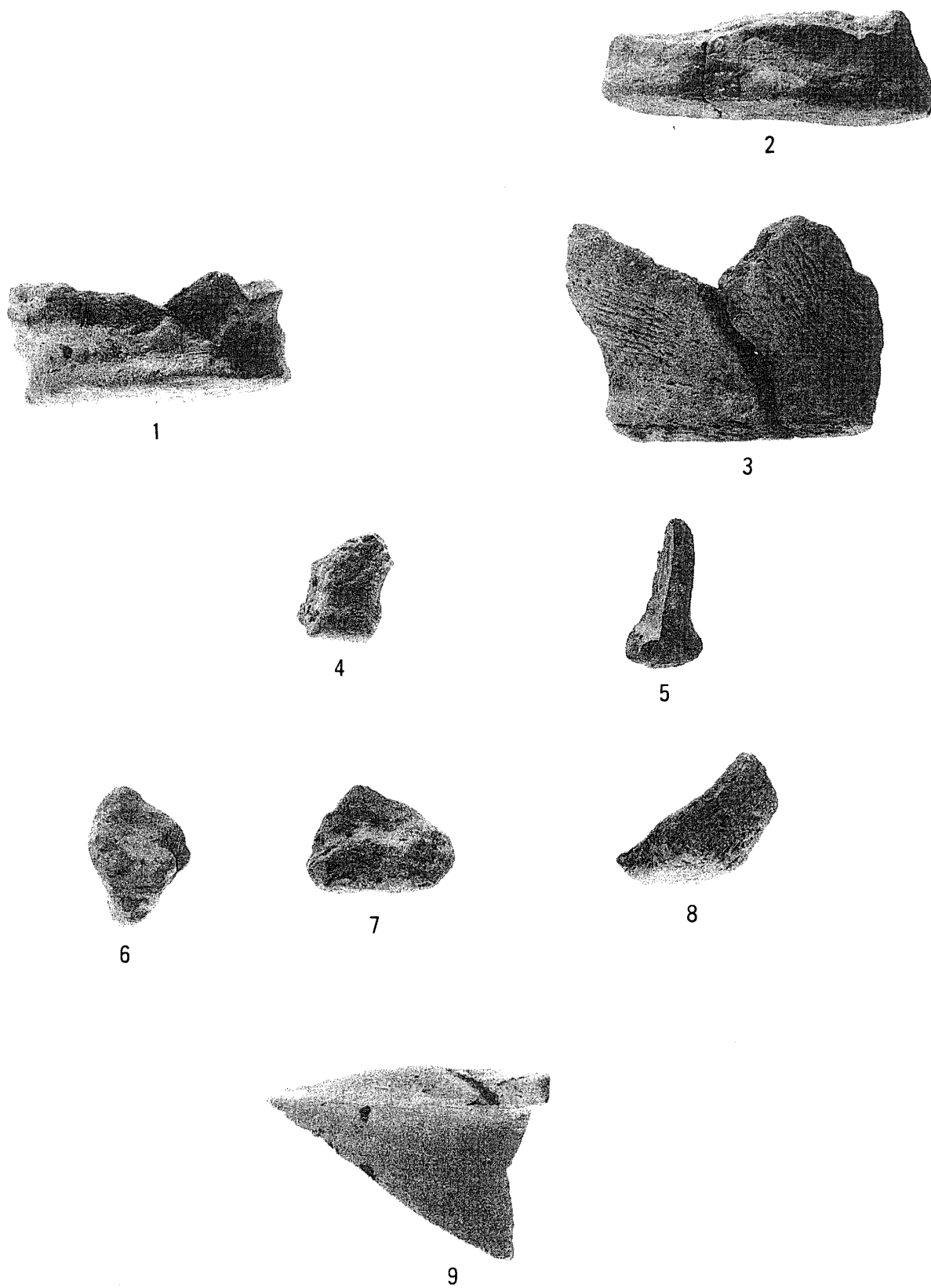
第Ⅳ図版 宇佐浜式土器の裏面(1~4)、後期土器の裏面(5~10)



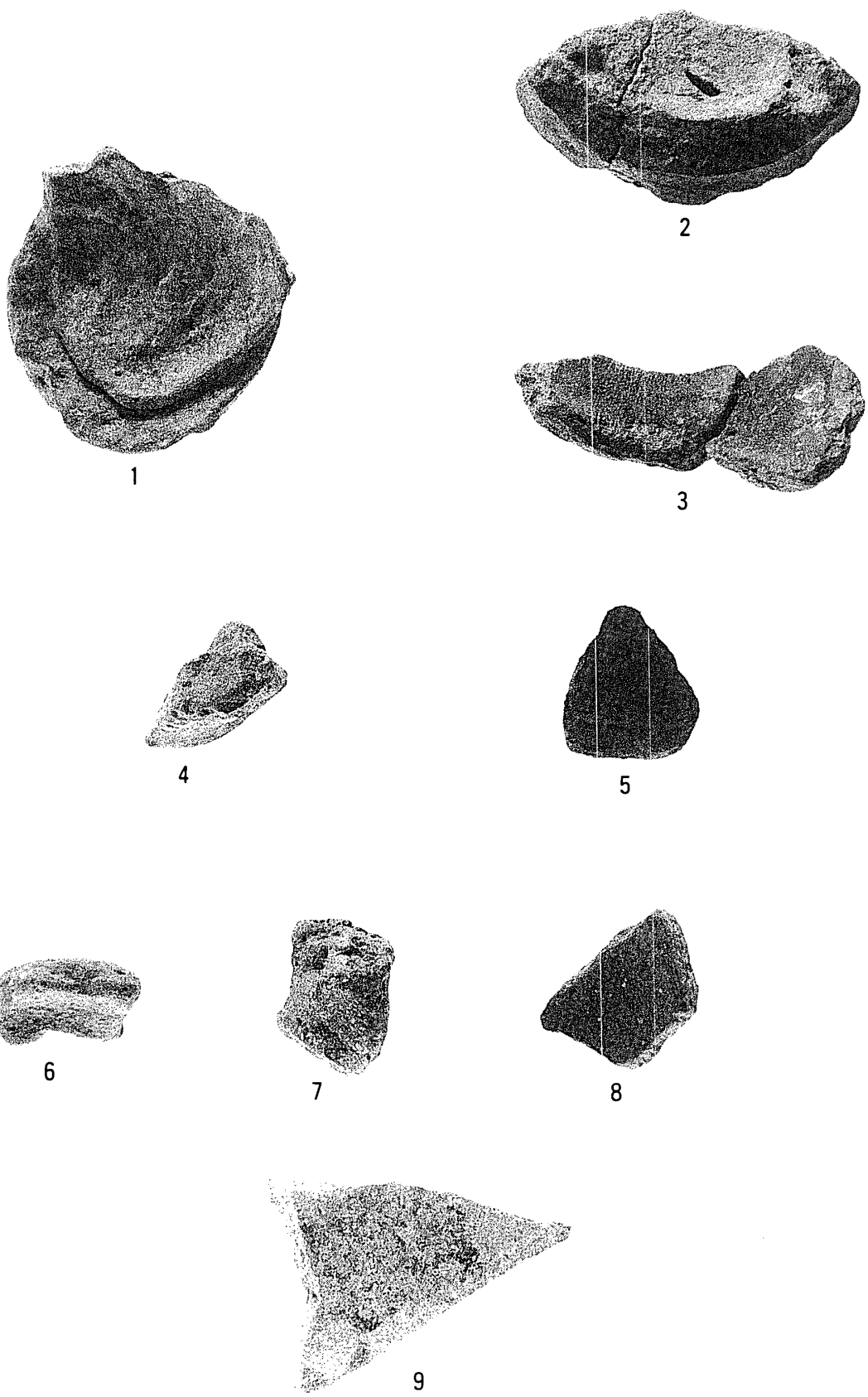
第V図版 後期土器(表面)



第VI図版 後期土器(裏面)



第Ⅶ図版 後期土器の底部外面(1~8)、褐釉陶器の外面(9)

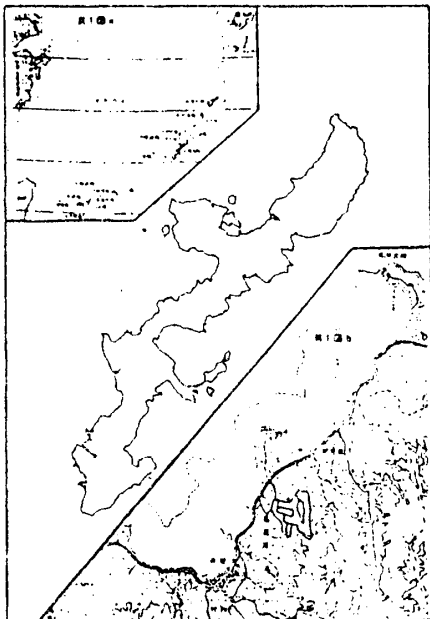
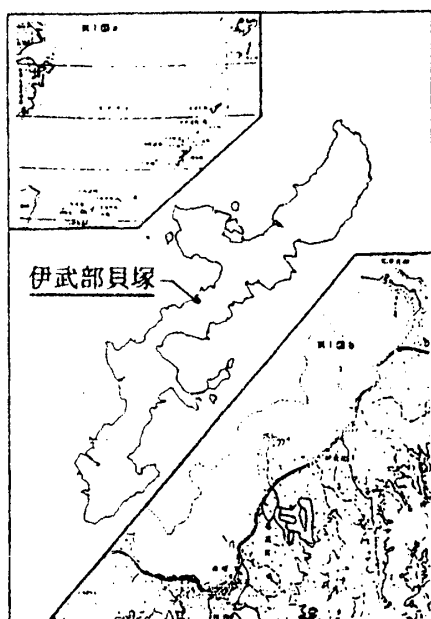


第Ⅷ図版 後期土器の底部内面(1~8)、褐釉陶器の内面(9)

第1表 沖縄諸島の暫定編年

本 土		沖縄	土 器 型 式	沖縄諸島発見の九州系土器	そ 編 年 他 資 料	原行編年
縄 文 時 代	早期	前期 Ⅰ	↑ ヤ東 ブ原 野国第4群 式土器 式土器	} 爪形文土器	ヤブチ式 6670±140 Y. B. P. 東原式 6450±140 Y. B. P.	早
			条室 痕川 文土器 曾畑 式土器 神野 A 式土器 神野 B 式土器		条痕文土器 曾畑式土器	
	中期	Ⅲ	面縄前庭 I 式土器 面縄前庭 II 式土器 面縄前庭 III 式土器 面縄前庭 IV 式土器 面縄前庭 V 式土器	旧具志川 A 式 旧具志川 B 式 旧具志川 C 式 旧神野 C 式 旧面縄前庭式		期
			神野 D 式土器 神野 E 式土器 伊波 式土器 荻堂 式土器 大室 山 式土器		伊波式（熱田原） 3370±80 Y. B. P. 伊波式（室川） 3600±90 Y. B. P.	
	晚期	Ⅴ	室川上層式土器 宇佐浜式土器 仲原式土器		入 佐 式 並 行 黒 川 式 土 器	中 期
弥生時代	前期	後期Ⅰ	真 栄 里 貝 塚	板付Ⅱ式土器 亀ノ甲類似土器		後
	中期	Ⅱ	具 志 原 式 土 器	山ノ口式土器		
	後期	Ⅲ	アカジャンガー式	免 田 式 土 器	アカジャンガー式は中津野式並行か？	
古墳時代 } 平安時代		Ⅳ	フェンサ下層式土器		類須恵器	期

◎「フェンサ下層式は城時代初期」とする見解もある。

ページ	訂正箇所	誤	正																																																		
30	表7の2～4、 6・7の図版番号	<table><tr><td>2</td><td>第9図1 第Ⅶ図版A・B-1</td><td>深鉢形</td><td>約10.4cm</td><td>I類1</td></tr><tr><td>3</td><td>第9図2 第Ⅶ図版A・B-2</td><td>深鉢形</td><td>約11.2cm</td><td>I類1</td></tr><tr><td>4</td><td>第9図6 第Ⅶ図版A・B-6</td><td>深鉢形</td><td>約11.8cm</td><td>Ⅱ類</td></tr><tr><td>6</td><td>第9図5 第Ⅶ図版A・B-5</td><td>壺形</td><td>約4.6cm</td><td>I類</td></tr><tr><td>7</td><td>第9図14 第Ⅶ図版A・B-14</td><td>壺形</td><td>約4.1cm</td><td>I類</td></tr></table>	2	第9図1 第Ⅶ図版A・B-1	深鉢形	約10.4cm	I類1	3	第9図2 第Ⅶ図版A・B-2	深鉢形	約11.2cm	I類1	4	第9図6 第Ⅶ図版A・B-6	深鉢形	約11.8cm	Ⅱ類	6	第9図5 第Ⅶ図版A・B-5	壺形	約4.6cm	I類	7	第9図14 第Ⅶ図版A・B-14	壺形	約4.1cm	I類	<table><tr><td>2</td><td>第9図1 第Ⅶ図版A・B-1</td><td>深鉢形</td><td>約10.4cm</td><td>I類1</td></tr><tr><td>3</td><td>第9図2 第Ⅶ図版A・B-2</td><td>深鉢形</td><td>約11.2cm</td><td>I類1</td></tr><tr><td>4</td><td>第9図6 第Ⅶ図版A・B-6</td><td>深鉢形</td><td>約11.8cm</td><td>Ⅱ類</td></tr><tr><td>6</td><td>第9図5 第Ⅶ図版A・B-5</td><td>壺形</td><td>約4.6cm</td><td>I類</td></tr><tr><td>7</td><td>第9図14 第Ⅶ図版A・B-14</td><td>壺形</td><td>約4.1cm</td><td>I類</td></tr></table>	2	第9図1 第Ⅶ図版A・B-1	深鉢形	約10.4cm	I類1	3	第9図2 第Ⅶ図版A・B-2	深鉢形	約11.2cm	I類1	4	第9図6 第Ⅶ図版A・B-6	深鉢形	約11.8cm	Ⅱ類	6	第9図5 第Ⅶ図版A・B-5	壺形	約4.6cm	I類	7	第9図14 第Ⅶ図版A・B-14	壺形	約4.1cm	I類
2	第9図1 第Ⅶ図版A・B-1	深鉢形	約10.4cm	I類1																																																	
3	第9図2 第Ⅶ図版A・B-2	深鉢形	約11.2cm	I類1																																																	
4	第9図6 第Ⅶ図版A・B-6	深鉢形	約11.8cm	Ⅱ類																																																	
6	第9図5 第Ⅶ図版A・B-5	壺形	約4.6cm	I類																																																	
7	第9図14 第Ⅶ図版A・B-14	壺形	約4.1cm	I類																																																	
2	第9図1 第Ⅶ図版A・B-1	深鉢形	約10.4cm	I類1																																																	
3	第9図2 第Ⅶ図版A・B-2	深鉢形	約11.2cm	I類1																																																	
4	第9図6 第Ⅶ図版A・B-6	深鉢形	約11.8cm	Ⅱ類																																																	
6	第9図5 第Ⅶ図版A・B-5	壺形	約4.6cm	I類																																																	
7	第9図14 第Ⅶ図版A・B-14	壺形	約4.1cm	I類																																																	
58	表25の8～13の 図版番号	<table><tr><td>8</td><td>第18図13 第XⅦ図版A・B-13</td><td>約5.4cm</td></tr><tr><td>9</td><td>第18図14 第XⅦ図版A・B-14</td><td>約5.6cm</td></tr><tr><td>10</td><td>第18図15 第XⅦ図版A・B-15</td><td>約7.2cm</td></tr><tr><td>11</td><td>第18図16 第XⅦ図版A・B-16</td><td>約7.8cm</td></tr><tr><td>12</td><td>第18図19 第XⅦ図版A・B-19</td><td>約3.6cm</td></tr><tr><td>13</td><td>第18図20 第XⅦ図版A・B-20</td><td>約4.0cm</td></tr></table>	8	第18図13 第XⅦ図版A・B-13	約5.4cm	9	第18図14 第XⅦ図版A・B-14	約5.6cm	10	第18図15 第XⅦ図版A・B-15	約7.2cm	11	第18図16 第XⅦ図版A・B-16	約7.8cm	12	第18図19 第XⅦ図版A・B-19	約3.6cm	13	第18図20 第XⅦ図版A・B-20	約4.0cm	<table><tr><td>8</td><td>第18図13 第XⅦ図版A・B-13</td><td>約5.4cm</td></tr><tr><td>9</td><td>第18図14 第XⅦ図版A・B-14</td><td>約5.6cm</td></tr><tr><td>10</td><td>第18図15 第XⅦ図版A・B-15</td><td>約7.2cm</td></tr><tr><td>11</td><td>第18図16 第XⅦ図版A・B-16</td><td>約7.8cm</td></tr><tr><td>12</td><td>第18図19 第XⅦ図版A・B-19</td><td>約3.6cm</td></tr><tr><td>13</td><td>第18図20 第XⅦ図版A・B-20</td><td>約4.0cm</td></tr></table>	8	第18図13 第XⅦ図版A・B-13	約5.4cm	9	第18図14 第XⅦ図版A・B-14	約5.6cm	10	第18図15 第XⅦ図版A・B-15	約7.2cm	11	第18図16 第XⅦ図版A・B-16	約7.8cm	12	第18図19 第XⅦ図版A・B-19	約3.6cm	13	第18図20 第XⅦ図版A・B-20	約4.0cm														
8	第18図13 第XⅦ図版A・B-13	約5.4cm																																																			
9	第18図14 第XⅦ図版A・B-14	約5.6cm																																																			
10	第18図15 第XⅦ図版A・B-15	約7.2cm																																																			
11	第18図16 第XⅦ図版A・B-16	約7.8cm																																																			
12	第18図19 第XⅦ図版A・B-19	約3.6cm																																																			
13	第18図20 第XⅦ図版A・B-20	約4.0cm																																																			
8	第18図13 第XⅦ図版A・B-13	約5.4cm																																																			
9	第18図14 第XⅦ図版A・B-14	約5.6cm																																																			
10	第18図15 第XⅦ図版A・B-15	約7.2cm																																																			
11	第18図16 第XⅦ図版A・B-16	約7.8cm																																																			
12	第18図19 第XⅦ図版A・B-19	約3.6cm																																																			
13	第18図20 第XⅦ図版A・B-20	約4.0cm																																																			
108	第3表の項目	<table><tr><th rowspan="2">土器</th><th>土厚 (mm)</th><th>1.0</th><th>5.0</th><th>6.0</th><th>7.0</th><th>8.0</th><th>9.0</th></tr><tr><th>層序</th><td>4.9</td><td>5.9</td><td>6.9</td><td>7.9</td><td>8.9</td><td>9.9</td></tr></table>	土器	土厚 (mm)	1.0	5.0	6.0	7.0	8.0	9.0	層序	4.9	5.9	6.9	7.9	8.9	9.9	<table><tr><th rowspan="2">土器</th><th>器厚 (mm)</th><th>1.0</th><th>5.0</th><th>6.0</th><th>7.0</th><th>8.0</th><th>9.0</th></tr><tr><th>層序</th><td>4.9</td><td>5.9</td><td>6.9</td><td>7.9</td><td>8.9</td><td>9.9</td></tr></table>	土器	器厚 (mm)	1.0	5.0	6.0	7.0	8.0	9.0	層序	4.9	5.9	6.9	7.9	8.9	9.9																				
土器	土厚 (mm)	1.0		5.0	6.0	7.0	8.0	9.0																																													
	層序	4.9	5.9	6.9	7.9	8.9	9.9																																														
土器	器厚 (mm)	1.0	5.0	6.0	7.0	8.0	9.0																																														
	層序	4.9	5.9	6.9	7.9	8.9	9.9																																														
117	《註文献・注釈》 の(註1)	(註1)東恩納寛博...1964	⇒(註1)東恩納寛博...1964年																																																		
128	第1図伊武部貝 塚の位置 (中央の図)																																																				
132	左段の22行目	第2図4は口頭部に...	⇒ 第2図4は口縁部に...																																																		